

北  
一  
輝

(平成十六年五月二十九日講演)

この会でのお話は三十回目、十五年になるという挨拶がありましたが、私はそんなに長く付き合つたという感じがしません。今後とも、皆さんにこうして聞きに来てくれるかぎり、いろいろなお話をしたいと思つております。

さて、今日は北一輝について、前回とは異なる視点から考えてみたいと思います。

北一輝と申しますと、通常、佐渡が生んだ偉人というような格好にしてしまつて、どうして偉人にしてしまつたのか、というようなことはあまり考えられなかつたのではないか。この会でよく申し上げておりますが、明治時代に佐渡から日本を背負うような人物が少なからず現れます。私は最近、如何なものかなどと言つてごまかしておりますが、よくよく考えてみると、その人たちは自分ひとりで偉くなつたわけではないんであります。明治という時代が、日本だけでなく佐渡にとつても非常に大きな意味を持つてゐる、と考えるのが本来であります。

ですから、北一輝を大政翼賛会（昭和十五年）を理由に持ち上げてみても、それはそれだけの話であつて、また、北一輝は大変優秀だつたと言えばなにも喋らないのと同じであります。もともと優秀だなんていうのはあまり意味のあることではない。北一輝自身いろんな

な問題を抱えております。言つてみれば、日本の明治が佐渡の人たちの考え方を必要としたからに違ひないと思ひます。

相川の士族の高田慎蔵などは、貿易商社「高田商会」を通じて八幡製鉄を作るのに大きな貢献をし、また、日露戦争でロシアのバルチック艦隊をやつつけることになる軍艦をイギリスから買つてきました。貿易で当たつたといえどそれもそうなのでしょうが、考えてみれば、どうしてこの男がたつた半年くらいの欧州商況視察で、こういうことを考へるようになつたか、ということは大変興味深い事柄であります。こういう風に考へれば、三井物産を作り、三井の大番頭といわれた益田孝もやはり大変な人物でありましようし、東京海上火災保険会社を作つた益田克徳（益田孝の弟）にしたところで、日本の財界の最右翼を担つた人物であります。

しかし、このように個人々々を並び立てるに随分佐渡から立派な人が出でるんだな、と  
いうことだけになつてしまひます。彼等がそれぞれの環境の中で、どうしてそういうことを考へるようになったのか、そして日本の将来を担うようなことになつたのかは、大変重要なことに思われます。本人が凜々しかつたとか、頭が良かつたからというような理屈はごまかしに過ぎません。みんなその時代々々に生きており、その時代のこと考へて育つ



高田慎藏

(『佐渡の百年』山本修之助)



益田孝

(明治記念館蔵)

てているのは自明のことです。北一輝を理論家などといいます、理論というのは時代とともに動いていくものであって、時代を超えて、天照大神が北一輝の考へてゐるようなことを考へることはあり得ません。それは担つてゐる時代が違うからです。

こういうことから、佐渡人がどうしてそういう風に考へることになつたか、少し本格的に考へる必要があると私は思います。

北一輝についても、お話しなければならないことは山ほどあるのですが、時間の制約もあるので、今日は、人との出会いというようなものを中心にお話したいと思います。

人はそれぞれの時代に歴史を紡ぎます。その人がどういう考え方を持つかはいろんな要因

がありますけれども、私は、その大きなものに、一つは人との出会い、もう一つは、その人が生まれ育った環境みたいなものが、その人の人生を決定する際にいささか役割を果たしているように思います。今日はこの二つに限ってお話を進めたいと思います。ですから、北一輝が何年にこういう本を書いたとか、何歳で銃殺されたとかいう類いのことはあまり触れません。どの本にもそういうことは出ておりますのでそちらをご覧下さい。

人には必ず影響を与えた人物がおります。昔、東大総長矢内原忠雄の『余の尊敬する人物』(岩波新書)には一度も会ったことのない人物を書いておりますし、また伝記などには、たまたま居合わせ、わずかな時間でその人から決定的な影響を受けたという例もたくさんあります。

さて、北一輝の場合、非常に大きな影響を受けた人物は何人かおります。その中の一、二人を取り上げ、考えてみたいと思います。

その一人は、八田三喜です。八田三喜については先般少し触れましたが、あらためてお話ししてみたいと思います。

八田三喜は、北一輝が佐渡中学生の時の二代目校長であります。数えで二十六歳ですから、校長としては今日では考えられないような年齢です。北一輝はこの校長に深い影響を

受けたと考えられます。ご存知のように、北一輝は明治十六年の生まれで、明治三十六年、『国民対皇室の歴史的観察（所謂国体論の打破）』という社会主義の論文を佐渡新聞に寄せます。二十歳というと中学（旧制）を卒業して一年か二年くらい、しかしこれが北一輝の一番大きな論文です。これをもとに三年後の明治三十九年（一九一三年）に『国体論及び純正社会主義』（以下、『国体論』）を出版しますが、一週間で発売禁止になります。北一輝には非常に論文が少なく、『日本改造法案』みたいなものが、あるにはあるのですが、明治三十六年の佐渡新聞の論調が一番はつきりしております。あとは、駄目だというわけではありませんが、この論調を見れば北一輝の生涯が分るというくらいの論文であります。どうして一番最初に書いたものが良いかという事は、追々触れてまいります。

さて、八田三喜は、後に府立三中（現両国高校）を経て、大正八年、赴任した旧制新潟高校で「赤の校長」の異名をとり、通俗的には共産主義者だったというような言われ方をしておりますが、佐渡中学当時はそう呼ばれておりません。彼の教え子を一、二あげると、府立三中では芥川龍之介や浅沼稻次郎（刺殺された元社会党委員長）、新潟高校では大島清（経済学者）や川端龍子（画家）等がおります。

八田三喜には『八田三喜先生遺稿集』（同刊行会、昭和三十九年刊、以下「遺稿集」）という本があつて、その遺稿集をみると八田三喜の考え方がよくわかります。とかく私どもは、八田が校長として佐渡中学校に来て、北一輝はその影響を受けたという結果だけを聞き、ああそうかというくらいにしてしまいがちですが、今日はその辺を少し差し繰って話をしておきます。

佐渡中学校は明治三十年に創立されましたが、創立されるについてはいろいろなことがあります。当初は県立ではなく、何ヶ村による組合立の学校なのですが、なかなか島民の賛成が得られなかつた。相川の森知幾(もりちき)（『佐渡新聞』の創刊者）などは、「普通の中学は要らない、それより実業学校を作る方がいい」というようなことを佐渡新聞に書いております。それから、島民の間でも、「佐渡に中学など何にする（要らない）、大部分が百姓と漁業なのに普通の中学校で英語など教えるなんて冗談じやない」というのが大方の雰囲気でした。いつも申し上げることですが、こういう考え方とは、私どもが大きくなりましてからも、大抵の家で、「女どもを高校や大学にやつて何にする、そこまでやつとつたら嫁に行けん」というようなことくらいは平氣で言つておりました。今日こういうことを口にすればひんしゆくを買いますが、佐渡人は基本的にこういう考え方（根性）を持つていることはご存知のと

おります。

ところで、開校はするのですが校舎がありません。そこで河原田の光福寺本堂を借りて授業が始まります。そして翌三十一年、八田三喜が校長としてやってきますが、八田は赴任の経緯をこんな風に書いております。

「（中略）なぜ、私が佐渡へ行つたかといういきさつは、明治三十一年七月、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業した時、私は考えるところあつて、文部省に、後に文部大臣になつた、当時の視学官岡田良平さんを訪ねて、文部属官を志願したことに始まる。明治五年（学制発足）以来二十五年間に教育制度が何べんとなく変り、そのころもまた学制改革論がむしかえされていた。私はこのような風潮に対して批判的であつた。二十五年間の日本の教育制度の経験を無視していたらずに外国の制度をあげつらつて何になるか、自國の教育制度の反省研究なくして学制についていうのは間違つている。私のこんな主張を聞いて岡田さんは、

『おもしろい、そういう根底の研究をする人が欲しいと思つていたところです。必ず推薦します』と引きうけてくれたのである。』（『遺稿集』）

彼が東京大学哲学科を卒業した時分の文部大臣は尾崎行雄、政党出の初めての文部大臣

です。日本は非常に官僚体质の強い国で、江戸時代なども世界に冠たる官僚国家の時代であります。今でも非常に官僚が強く、大臣があれこれ言つても、三ヶ月もすれば大臣の方が凹んでしまうような事態になることはご承知のとおりです。これは良かれ悪しかれ、日本という国家がそういう風に動いてきた結果です。

ところが、尾崎という政党人が文部大臣になると、官僚はみんな自分が辞めさせられるのではないかとおののいたと言われております。結果的には尾崎の方が辞めさせられるんですが、まあ、尾崎が文部大臣になると、これから世の中が変わりそうだというような感じを当時の世間に抱かせたらしい。

そして、

「七月十日頃、岡田さんから呼び出しを受け、『いかがですか、地方にでませんか』（中略）『どこですか』『佐渡です』『佐渡ですか。毎年暑中休みに金沢に往復する途中通る直江津と、一衣帶水のところじやありませんか』と思わず答えてしまった。『行ってくれますか』。ここここに到つては、『行かれません』ともいえず、ついに佐渡へ行くことにつた。」（『遺稿集』）

この経緯を紹介したのは、八田三喜が佐渡中学へ行くについて、自分は月給いくらで勤

めるということ以上に、こういう教育をやりたいという考え方を持つていたことを示しているからです。この遺稿集には北一輝がしばしば登場し、八田は、なかなかきかない生徒という風に述懐しております。

さて、八田は新潟へ出発し佐渡に至る経緯を当時の社会状況を交えながら、こんな風に書いておりますので、気楽に聞いて下さい。

「当時はまだ上越線どころか、信越線も汽車は直江津まで、そこから人力車で米山を越えて長岡へ出、そこから北越鉄道というのに乗つて新潟の沼垂へついたのである。一面の水田地帯、えらいところへやつて来たなと思った。四百三十間という木橋の万代橋を渡つて新潟の市街へ入つた。橋賃が一銭か二銭だつたと思う。

新潟と佐渡の間は度津丸という百トン足らずの木造汽船が往復していたが、天候が悪ければ欠航するか、中途で引返してくる。私が新潟へ着いたときもしけで、一週間ほど風になるのを待たねばならなかつた」（『遺稿集』）

この頃は、越佐汽船が佐渡・新潟間に就航しており、北一輝の叔父さん（星野和三次）がそれに対抗して新しい汽船会社をたてますが、やがて潰れます。

「その間、友人の家に泊っていたが、十一月二日の夜、『ぶらぶらしているのもつまらん、

「今晚は河岸をかえて」と、対岸の沼垂で友人と盃を傾けているところへ、夜半近く佐渡の郡長から使いがあり、今晚急に船が出るという。『そりや大変』とあわてて乗船したこの頃はいい加減なもので、風ぎになると乗船名簿を書いた人に知らせて、これから船が出る、という風であつたらしい。

「その郡長は、これから私の赴任する中学校の御真影を受け取りに来ており、明日の天長節に是非とも間にあわせるべく、その晩無理に船を出させたのであつた。

十一月三日の朝、両津の「夷」という港に着いた。そこから郡長が人力車に御真影を捧げて乗り、私はその後ろの車にフロックコートに威儀を正して続き、佐渡を横切つて中学校のある河原田に乗り込んだ。校門に近づくと、教職員以下生徒全員整然と並んで待ちうけている。これはえらい出迎え方だと面くらったが、気がつくと私の出迎えではなく、全校あげて御真影をお出迎えしていたのであつた。

落成したばかりの中学校に入った私は、今度は新任校長として郡長から御真影を受けとり、講堂の奉置所におおさめした。そして生まれてはじめて、『朕惟フニ……』と教育勅語をよんぐで、私の教育の歴史が始まつた」（遺稿集）

大学を出たての二十五歳の青年は、校長として、こんな顔をして佐渡へやつてきたわけ

であります。



八田三喜



北一輝（二列目中央）



創立時の佐渡高校校舎（正面）

（いずれも『佐渡高校百年史』）

ところで、北一輝は中学（旧制）が出来た時に入学、二年目（明治三十一年）に選抜試験によるクラス分けがありました。クラス分けといつても、今のように一組、二組というのではなく、勉強の出来具合をみて一年生にしたもの、二年生にしたもの、三年生にしたものとありました。当時のような分け方がいい加減なのか、今がいい加減なのか。勉強すればもっと飛び進級させてくれるんですから、まあ、当時の人はそれが当たり前と考えていた

ようです。この辺りの教育事情は、小松辰蔵先生(両津)に詳しく書いたものがございます。翌明治三十二年、十六歳のとき、眼を患つて新潟の阿部眼科に入院し、更に東京病院に入院して、勝本という博士に厄介になり、眼の治療をします。翌年、十七歳の時、四年生になりますが、勉強をしない。この年の同窓会誌に四年生十三人の名前が載つておりますが、北一輝(本名・北輝次)の名は欄外に書いてある。学校を休んでおりますので、あいうえお順になつていな。体操と化学の出来栄えが悪く、落第、秋に退学届けを出すことになります。体操などは一度も出席したことがなかつたそうですから、相当野暮な話です。

先般も申し上げたかと思いますが、北輝次について何人か証言をしております。その一人、市橋輝蔵という同級生の証言を昭和四十年頃録音し、私どもの方で保存してあつたのですが、放送会社がなにかの事情があつて貸してくれと言うので、二時間ほどのテープを貸し出しました。ところが、このテープは返されなかつたんです。人の物を借りて返さないとは何事かと思いましたが、今でいう文化庁が「これは大変貴重な記録なので、是非文部省が保管したい、ついてはあなた方は文部省から給料をもらつて暮しているんだから、言うことを聞け」というようなことであつたらしいんです。まあ、それはさておき、録音は別に記録してありましたので事なきを得ました。

そこに市橋がこういうことを言つております。

「日は忘れてしましたけれども、それは寒い冬の日のことでした。一時間目に校長先生の修身の時間がありました」

今は、「道徳」という科目になつておりますが、昔は「修身」といいました。修身というのはどこでも校長が担当することになつております、善いことは勧め、悪いことは懲らしめるという、まるで文部大臣みたいなことを言うような仕組みであります。私の佐渡中学校時の校長は秋野亀太郎という人ですが、修身などは教えません。八幡祭りになると午後から休校する様な校長で、修身を講ずる資格など全然ないのを生徒も知つておりました。そして、聞こえよがしに校長の悪口を言うと、その日は授業を休まなかつたというような話を聞いたことがあります。おかしいような話ですけど、当時はいい加減なところがあつたようです。

さて、市橋によると、

「修身の時間に校長先生が進化論の話をし、その時代々々に特有の価値観があつた、と。ところが、北輝次君はすっかりそのとりこになつたらしいんです。二時間目も三時間目も教室を空けたままで帰つてきませんでした。お昼休みに近い頃、顔を赤くして帰つてき

た輝次君に『どうしたの？　どこへ行つたの？』と訊くと、輝次君は『校長室で校長先生の話を聞いてきた』と、興奮した面持ちで答えました。この日から輝次君は人間が変わつて、寝ても醒めても社会進化論しか言わなくなつた』といふ。

八田三喜は、第四高等学校で、後に京都大学の先生になつた狩野亨吉こうきちの教え子で、狩野は江戸時代の農村史の研究で優れた業績をあげ、安藤昌益を世界に紹介した人物です。安藤の書物『自然真営道じねんしんえいどう』にはいろんな事が書いてありますが、要するに、「東北飢饉で岩手県の農村に行つたら百姓が飢え死にしかかつて医者のところへ来るが、一方武士は来ない。世の中、飯をこしらえる百姓が飢え死にしかかつて、食料を生産しない武士が飢饉に遭わないというのはどうしてか」というような理屈を述べ、これは世の中が間違つていいという風に書いております。こうすることを出発点にして狩野亨吉は、ダーウィンの進化論を用いて社会進化論、社会というものはどういう風に展開していくのか、という事に少し科学的な関心を持つたらしいんです。八田三喜はこの狩野亨吉に影響を受けた人物だといわれており、狩野から習つた社会進化論を佐渡中学の生徒に喋るわけあります。

ですから、この八田がどんなことを喋つたかを見れば、その影響の受け方がわかります。後年、こう書いておりますので、そういうことかなと思つていただければ十分です。

「蘇我、物部氏から藤原と、久しい間の氏族の政治が七百年の武門政治となり、幕府が倒れて王政維新から立憲体制になつて来てる。其の間を通じて動いているものは何だろうか。特別の貴族に限られて居た参政権が、彼等が駆使して居た武士にまで及び、夫が今度は武士の徵税の為に活きていると思われて庶民にまで及んできたのだ。宗教にしても法相、三論、俱舎、唯識の哲学的仏教が比叡、高野の古典的宗門となり、夫が淨土、日蓮、禪の通俗的宗旨となつて来ている間にも、学究から貴族、貴族から庶民にと来ている。近頃流行の言葉で言うと、民本的傾向といえるかも知れぬが、之には語弊があるから、庶民的というのが妥当だと思う。此の大勢は日本文ではなく、凡の国や世の中の進化の趨勢であるのである。(中略)又經濟にした処が、奴隸同様だった小作人や職工が、独立の自由人として取扱われ、夫が今度は株式分与法などで、資本家仲間に待遇され、其の上、彼等自身の組合権まで法律上認められてる國もある」(『遺稿集』)

こういう話を聞いて北一輝は舞い上がります。民主主義だとか、民権だとか、人権だとかを言うとたちまち国体論に反すると言われる世の中で、この校長は全く予期しない発言を始めます。八田はこの人民という言葉を頻りに使うのですが、北一輝は人民とか民主主義というセリフにすっかりのめり込んでしまったわけです。しかも、言わなければよいの

に、この校長はこういう風なことを言います。しかもメモをとっているんですね。

「庶民的だとか民本的とかいうと、直ちに我国体がと騒ぎたがる人がある。考えて見るのがよい。我国体には何處に庶民を蔑視する歴史があつたか。よしあつたにしても、そんな時代は進化の過程上引繰り返してしまつてゐる。庶民を蔑視するような天皇は流されるではないか。特權的な階級が次第に進化していくつて大化の革新、幕府創設、明治維新から憲法発布に発達して、ここで一度新たな庶民的制度となってきた。それが歴史の流れというものだ。庶民各々そのところを得、各々その志を遂げて、遂に立派な皇室中心の庶民的社會だ。君臣同祖同在の國家が活きて來るのである」

こう述べたあとで、政府といふものも、支配者といふものも、本来国民のためにあるものだ、と結論するのであります。「だから、国民と国家は別ではなく、国民は国家そのものである、そのままそれは社會であつて、明治政府は社會の要求する議会開設の要求を拒み続けて來たのだ。しかも議会が出來ても、その議会の決定を実行しようとしている。その度ごとに口ぐせのように、日本の國体は他の國と異なつて優秀なんだというようなことを主張する。そして議会の要求を振り切るために、しょっちゅう用いるのが忠君愛國、國民は國家のために犠牲になれ、政府に反対する者を國賊だと言つてゐる」

こういう言い方が、この北少年の心を揺り動かすのであります。八田は、政府は教育を手段にして、素朴な郷土愛を国家への献身へと摩り替えようとしている、と批判しております。これは、まあおとなしく聞いていればもつともだと思うのですが、北一輝が後に出す『国体論』のなかで、天皇といえども国民に反する場合は、天皇はその地位から追い出されるのは当然であると言い始め、それが問題にされて発売禁止になつていくわけです。

北一輝がこういう考え方を持つについて、それまでに受けていた教育というか、考え方が影響している部分があります。

明治元年、奥平謙輔が佐渡へ「民政方」として乗り込んできました。彼が佐渡に来る少し前の慶応四年、佐渡奉行所の役人が幕府擁護のため相川で団結し、「迅雷隊」というのを結成します。この団結式で述べられた文章は修教館教授の円山溟北が起草し、「我々はもう長い間幕府に厄介になつてきました。だからこういう時に幕府に忠誠を尽くすのは自分たちの義務だ」という風に書きます。そのうちに奥平が乗り込んできて、これを書いたのは誰だということになり、円山は名乗り出ます。円山はもう自分は切られると思ったそうで、本当に半分切られるところだつたんです。奥平が、「お前はこういうことを書いて天皇に刃向うた。最後に申し述べる事があるか」と言つて刀を抜いて詰め寄つたらしい。そこで円山

は「我々は徳川幕府三百年の恩義に報いようしている。もし貴殿が私のような境遇であつたならどうしますか」と訊ねたそうです。奥平がどう答えたかは知りませんが、円山の首を切らなかつた。そのことについて書かれたものがあるのですが、要するに、逆賊といふけれども、幕府に勤めていた人たちが幕府に忠誠を誓うのは当然ではないか、そのことが奥平には理解出来たらしい。奥平は佐渡を去る時、まあ、厄介（やっけえ）になつたということかもしませんが、円山と握手をしております。

八田はちよくちよく、「天皇といえども国民の意志に背けば、天皇自身が全國民の敵にされることがある、幕末はそのとおりだ。幕末は国民が背いたのではなく、天皇が国民に背いたのだ。だから東北地方の人民が立ち上がつたのだ」と説明する。北一輝もこういう述べ方をし、それが発売禁止の理由になりました。後に、こういう考えをひつくるめ、日本の武士道だなんて馬鹿げたことを言う人たちが出てきました。

八田三喜が北一輝に非常に大きな影響を与えたというのは、北一輝が今述べたような考え方を生涯持ち続けたということから明らかです。

北一輝は「天皇機関説」の持ち主だつたと書かれております。天皇は国民のために存在する機関である、と一見天皇を中心として国家をまとめようとしていたのは事実ですが、そ

れは、「天皇のために国民が存在するのではなく、天皇は国家・社会のために存在するのである、それゆえ天皇は国民、国家の意志を代表すべきものである」と主張しております。それで後に北一輝の考えは「國家社會主義」と呼ばれることになります。私どもは、社會主義といえば毛沢東か、周恩来か、それより前の孫文が発明したように思いがちですが、そういうではなく國家というもの、国民みんなが国家であるという考え方、ですから社会を富ませることが国家の目的なんだ、と言いたいわけであります。それを広げて考えますと、後の孫文などが唱える国家というものは社会主義でなければならぬ、そういう考え方が北一輝を支那の革命運動に携わらせることがあります。ある意味では毛沢東や周恩来などがその影響を深く受けるという、面白い関わり方をする訳であります。中国の共産主義というのは、ロシア革命の共産主義とはちよつと違い、国家として全体がまとまっておりましてよ、これが中国という国の社会主義です。ですから、北一輝が主張していたことを延長していくたら、ひょっとして中国のような格好になるのかもしません。

戦後の書物の中には、よく北一輝の考え方はムツソリーニ(イタリア)のファシズムと同じだと書かれておりますが、北一輝とムツソリーニとはちよつと違うように思われるんです。イタリアへ行きますと、人が物事をやる時、例えば村でお祭りをやるのを見ますと、大き

なグラウンドで地域毎に特徴のある着物を着て、また特徴のある踊りをやっている。お終いには地域を代表するもの同士で競馬を競います。こういう青年同盟、青年団のようなのを中心にして国家組織を作つております。これは日本なんかと違う社会の作られ方ではないかと思われます。

日本の町や村の今の動き方を見ておりますと、イタリア的というより、どちらかといえばドイツ的な感じがします。そのことはドイツの飲み屋に行くとよく分ります。日本ですと飲み屋で人が歌うと、早く止めてくれんかなあという顔をしますけれども、ドイツではそれと違つて、全員で合唱します。たぶん気持の悪い人もいるんでしょうが、みんなで歌うということが非常に好きなようです。こういうのが好きな日本人も居ることはいて、デモンストレーションをやることがあります。イタリア人の生活の仕方より、ドイツ風の団結みたいなところが日本人に近いように思います。まあ、日本人とドイツ人が近いと言つたところで所詮は遠い話ですけれども、生活レベルではちょっと日本はドイツ的かなと、考えます。

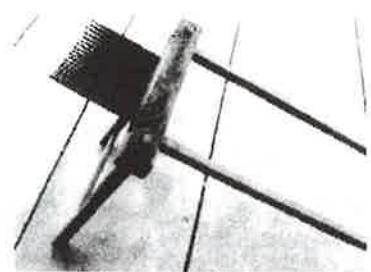
北一輝が十五、十六の時、八田三喜から学んだことは生涯の思想の上で大きな役割を果たします。ですから、北一輝が国家社会というようなことを言うのは、それが北一輝の社

会主義であつて、特別な、いわゆる「社会主義」ではありません。国家全体、社会全体、或は国民全体のために何かをやる、ということですから、日本の全体主義というような言い方をすることもあります。特定の言葉を取り上げているとキリがないのですが、要するに、北一輝の言葉をかりれば、国民が幸福になるためには国民が総力をあげて運動しなければならない、と。その国民全体の国益とはなんであるか、北一輝の国益論をみると、江戸時代の佐渡の商人たちが言つてている国益論と非常によく似ています。

例えば、佐渡で「国益」ということを主張したのは、幕末の頃羽茂村の氏江市郎兵衛という人物です。氏江市郎兵衛のことをお話したことがあります（第三集「千歯こき—氏江市郎兵衛の話」参照）、「千歯こき」（次頁）を作り、越前、越後、秋田などのほか、東京の御徒町に支店をつくり広く売つたのであります。

市郎兵衛がどういうことを言つたのか、佐渡奉行所に出した願書があります。

「佐渡では昔から稻こきを他国から買入れるため、他国へ巨額の金銭が流失しております。そこで私は出雲から鋼（日本で最高級品）を買い、越後から木を買うてきて、佐渡中の鍛冶屋に羽茂に集まつてもらい、稻を扱く千歯扱きを作りたい。それを他国に売り、国益にもなると考えて佐渡にお金が転げ込むようにしたい。しかし、島内の千台では商売が成



り立たない。だから私がもつと製作して大量に諸国に売り出すことを助けて貰いたい」

こうして、実際に年間五千台ずつ作り、三千両のお金を手に入れます。新発田藩では氏江の千歯こき以外は買ってはならないという法令が出るくらい、氏江は販売戦略に意を用い、全国に広めるんです。自分の国にたくさんあって自国で余ったものを他国に売るというのではなく、自分の国に無いものを作つて、自国で用い、他国にも売るというのですから、殖産振興そのものといえます。こういう国益の考え方というのは、明治の日本の資本主義の考えに非常に似かよっています。それに関連して、後ほど、山本悌一郎（元農相）の話をしたいと思ひます。

このように、佐渡の人間が考えたことが、明治の日本人の考え方につながっていくことが、お分かり頂けるのではないかと思います。

今申し上げたことは、北一輝の頭の良し悪しに關係なく、この八田三喜に会わなかつたら北一輝の社会主義論は出てこなかつたろうし、先生が喋つても生徒に聞く気がなければ全然「らちやかん」（埒があかない）わけです。

それで今日の主題ではないんですが、北一輝の中学時代、取り巻く社会状況がどうであったか、ちょっとだけ補足しておきます。

一つ目は、相川にあつた佐渡支庁を国仲（河原田）へ移転させる運動がありました。この運動の先頭にたつたのは先ほどの鵜飼郁次郎です。鵜飼の家には、相川の一青年からきた「必ず殺す」という脅迫状が残つており、当時はこの種のことは日常茶飯事で、日本人のいささか過激なところは昔と変わりがないようです。

二つ目は、佐渡汽船問題ですが、これがまた何ともいやらしく、複雑なんですよ。

江戸時代から佐渡の玄関といえば小木です。それを（両津の）夷港へもつていくとは何事か、などの話をすれば一日はかかるくらいあるんです。両津が小木に取つて代わるのは明治十九年から二十年、県道両津・相川線が出来たからです。今はすいすい通りますが、小木へ行く途中、西三川の曲がり角、いわゆる「ななまがり」は、昔は自動車が前进だけしか通れなかつた。曲がり角の上に小泊という部落があり、そこへ道を通す計画でしたが、「おらち（我々）の村には絶対自動車道を作らせない、相川から逃げてくる荒くれどもが来ると困る」といつて反対した。そのため高崎という部落の下に道路を変更しました。その時の西三川村長は椿尾という部落の出身ですが、部落の人から「そんなことをし

てみい、次の選挙では落とすぞ」といわれ、怯えて今のルートになつたんです。そういうことで、モタモタしているうちに相川・両津線が先に出来て、両津が勝つんです。両津にしても曲折があつて、県の吉井・湊線に対して湊の人たちが、「我々の家を引っ込んで、どうして国仲の者が両津へ出る手助けをせにやならんのか」と絶対反対でした。こういう、他人の都合のために自分が犠牲になるのはごめん、という考え方(根性)を私どもは今も持ち続けております。その反対のため行き詰っていたところ、夷の若林玄益という化粧品屋のお爺さんが、「私どもの村を通しましょ」と、加茂村を通る今の本線が出来て、佐渡と越後の航路がつながり、所謂佐渡航路になつたんです。先ほど申しましたように、直江津からは両津・新潟への航路がありました。ですから、そこから小木へ直通させればよほど良かつたはずです。明治二十年にそうなつていれば、小木がやっぱり昔のように表舞台に立つていただらうと思われます。

最近、佐渡汽船(県が半分出資)は赤字で、経営が苦しいので小木・直江津航路を廃止したいときやいているそうです。小木の人たちは絶対反対と強く構えていますけれども、ひよつとすると廃止にならぬとも限りません。まあ、直江津へ行くに新潟経由で行つたつていいんじゃないか、という声もあるわけで、何しろ佐渡汽船はジェットフォイルを売却

しなければならないような経営状態があるので、なかなか現実は厳しいようです。

港の問題になるわけですが、同じ両津の港といつたつて、「湊」の方、「夷」の方とあつちこつちと江戸時代から移動しております。はた目には仲は良いように見えますが、いろいろ微妙なことがあるようです。明治二十三年、北一輝の少年時代に、相川騒動という大きな米騒動が起きております。この騒動の端緒は簡単なことです。この年、米価が暴騰し、両津の漁師連中がそれに困つて、両津町長（初代）北慶太郎（北一輝の父）に、佐渡の米を他国に売るのを止めてくれ、と願いでました。町長は人が好いもんですから、それじやあ止めましよう、ということにします。そして、こつそり米を積んだ場合はそれを没収して払い下げるというようなことをやります。ところが米の他国出し禁止は総意というわけではなかつた。それが夷の岩原という有力者で、自由党（北慶太郎や若林玄益などが有力者）が港を閉鎖するのに対抗して、改進党がそのことを政治に利用します。例えば地主の多い金澤村などでは米を荷車に積んで河崎（両津の南）の浜まで運び、船に積んで本気で他国出しをやります。みんなやる気でやるんです。

こういうことがあって、明治二十三年、両津で岩原打ち壊しが起こり、その翌日、衆議院議員選挙（七月一日）の前日、相川で起きた農民の暴動が国仲まで押し寄せ、自由党員

の家を焼打ちにするんです。この暴動の黒幕は相川町長の秋田藤十郎という人物でした。

警察の調べでは、この人の家には暴動を起こすときに必要ないろいろな道具が片付けてあつたということですが、政治向きの難しいことがあり、それは問題にされなかつたといふことです。このことは、相川の検事だつた人物が、後に東京(八王子)に移り、「秋田が自由党に反対する連中を焼きつけて、自由党員の家を焼打ちしたのだ」と顛末を日記に書いて残しました。

そのとき、例えば沢根(佐和田)の青野季吉(文芸評論家)<sup>あおのすえき</sup>の家などは単に自由党員といふことだけで船を焼かれるなど、大損害を受けましたし、河原田郵便局長(高橋某)の家などもやられました。それから、握り飯を差し出して勘弁してもらつた家などもあつて、暴れまわつたようあります。打ち壊しや焼打ちなど、暴れる方は半分遊び気分でやつたのでしょうか、やられる方は堪つたものではない。この騒動は本来政党の争いとは何も関係がなかつたのに、反対運動を政治に利用するということが盛んに行われたものの一つで、今も事情は変わりがありません。

こういう問題の処理について、親たちが話すのを北一輝はコタツに入りながら聞いてお

ります。北一輝は少し早熟のところがあつたと言われますが、子供の頃、若林玄益（民権運動の一人）のところで勉強していることもあるでしょうし、町で日常起きている事柄について、親たちがこぼす愚痴、しかも片方のねじ曲げた話が毎日のように耳に入るのですから早熟にもなりましよう。こういう時に米騒動が起きて、野次馬として聞いているものの、自分の親は町長のこともあり、隣近所どこへ行つてもいろんな話でもちきりです。

それから汽船問題ですが、北一輝の叔父さんの星野和三次は、相川の秋田藤十郎などの越佐汽船会社に対抗して、汽船会社を作り、これが競争に競争を重ねた挙句に敗北、倒産します。何しろお終いには、両津・新潟間の運賃がタダのうえに、風呂敷をくれたというような凄いことになる。政党がらみのことから始まりましたが、これはもう、「江戸のかたきを長崎で」なんていうもんじやなくて、本気で熾烈な競争を繰り広げたのです。自身の身の回りでいろんなことが起きると、子供ながら心を痛めるんです。北一輝の家は造り酒屋ですが、明治二十三、四年頃、加茂湖に塩水が流入したのを知らずに醸造したため酒が腐り、結局家業は潰れるという悲惨な目に遭う。こういう具合に、北一輝の家の周りで、非常に身近な問題として社会のいろんな出来事が起きておるわけです。

こういうことからか、明治三十年、彼が佐渡中学入学して以来、仲間内で話すというこ

とが一体なんになるのか、という気持を抱きはじめます。北一輝の国益論、国家の利益、国民全体の利益を考えない、そういう目的を持たない運動は価値がないとする素地が与えられるんです。北一輝は頭が良かつたので、その後独特的の愛国主義が生まれたというようなことも事実であります。けれども、彼がそういうようなことを感じるようになつた事情がある、ということを私ども佐渡の人間は知つておくべきものと考えます。

さて、もう一人、山本悌二郎のことを少しお話してみたいと思います。

山本悌二郎をご存知の方もおられるでしょうが、真野町の漢方医者山本桂の次男（有田八郎元外相は弟）で、明治三十七年衆議院議員初当選、昭和のはじめ頃に二度農林大臣をやり、また、実業家でもありました。北一輝は明治三十五年に、この山本悌二郎の衆議院議員立候補（憲政本党）の応援演説をぶつて歩いております。このことについて、小松辰蔵先生の書かれたものを含め、大体佐渡で書かれたものは、「山本悌二郎の応援をしたのは、北一輝の潟上（新穂村）の叔父さんの本間一松が山本と親類だったから」という風に片付けております。私はここのことろをちょっと補足しておきたいと思います。

山本悌二郎が佐渡中学で行つた講演の記録（要旨）が同窓会誌『獅子ヶ城』（第九号）に載



山本悌二郎  
『佐渡の歴史』(郷土出版社)

つておりますので、紹介しておきます。山本悌二郎なる人物が北一輝に大きな影響を与えたことが分ります。

「日本は東洋のイギリスだという者がおる」

こういう言い方を私どももしましたよね。イギリスは七つの海を支配する、日本は東洋のイギリスだと。「日本国」とい

う考え方には日本では割合強い。日本人が何かを言うとき、時々世界のなになにとか、世界一大きいとか、長いとか短いとかいう類、こういうことを言つて得意がるクセ(考え方)は明治の頃からあるらしいんです。それは、ともかく、

「しかし、内実を見よ! 両者には大きな違いがあるぞ。貿易を見ると、イギリスの貿易額は二十五億円、日本は二億円で、十分の一ではないか。(中略)……。日本が東洋のイギリスとして体面を保つに先立つものはお金である。お金がなければだらかん(埒があかない)。そのためには国家の経済を根本から刷新する必要があると、わしは考える。

農業、商業、工業、この三つのうちで日本経済の国是、国家理念として何を選ぶかが問題になる。農業の国是論者は次のように言う。日本は古来、瑞穂の国と言われ、米をはじめ農産物の豊作、凶作は経済界に死活の運命を与えます。即ち、天候が和順で豊作な

らば人民の購買力は高まり、内外の貿易市場は好況となります。これに反して凶作となれば、購買力はなくなり、会社は製造をやめ、ついには輸入超過に陥ります。今、米の日本の生産高は四千万石です。その一割が減少すればその分外国からの供給に仰がなければなりません。そういう国家にしてはならないという風に農業論者はいう

今でも盛んにこういうことを口にします。

「商工業論者は、農業なんかは問題ではない、と。日本は工業国として発展すべきである。だから大量の物を生産して外国に売つて儲ければ、それで農産物を買えばいいではないか、と」

山本はこういう意見があると述べた後、

「私にすれば、農業も工業もバランスをとつて発展させるのを國是とすべきである」

山本悌二郎はこういう考え方をするのですが、彼が講演して百年経ちますけれども、今も同じようなことが問題になります。日本では外国から農産物を買い入れることには大変強い反対意見があり、農村は当然困ります。しかし工業だけにして、農産物を外国から買入れることが国益としていいかどうかは、これまた問題です。日本は現在農産物の関税を高くせよ、あるいは、安くせよと、両方を天秤にかけて操つております。農産物輸出国

から関税の撤廃を要求されると、日本の農業を守るために関税をかけるのは当然であると、WTOで主張していることは、周知のとおりです。山本悌二郎は当時、このようなことを問題として取り上げているわけであります。ですから山本のような考え方を、北一輝は親類の者の主張として眺めているわけじやない。日本の将来を考えるうえで、この山本の提言は北一輝に大きい影響を与えているのではないかと考えられます。

山本は、明治十九年三月、新任のドイツ公使品川弥二郎に随行し、ドイツに留学、明治二十五年、農業学博士号を授与されます。こういうわけで農業問題についてはかなりの知識を持っており、世界の農業はこれからどうあるべきかについて、（品川の影響もあるのでしようが）これまた斬新な意見を持つていて、彼の考え方が北一輝に影響を与えることになるようです。

いま私は、山本の選挙応援をしながら、北一輝は山本からヨーロッパ帰りの意見を聞くことになつたと申し上げましたが、もう少し山本の言うところを聞いてみましよう。

「日本は交通の機関で欧米の大國に劣るとはいへ、決して将来の望みがないものではない。現に着々と歩を進めつつあるではないか。この国の位置は東には北米、カナダを、南に南洋諸国を、西には支那を控える等、よい位置にある。太平洋と大西洋が運河（パナ

マ）で結ばれ、シベリア横断鉄道が全通した暁には、世界商品の大問屋となれる資格を持つてゐる。国民の決心如何によつては、世界の商工業国となるのは決して難しいことではありません。それゆえに、農業がなくともその方面に使用する資本と労力を商業に投下し、その利益で米と農産物の不足を補えば国家の発展はなんら差しつかえるものではない」

今私どもはこのような路線で動いております。

山本は、「イギリスへ行つてごらん、イギリスの田畠は草ぼうぼう、牧草地にしかなつていない、こんな国土の使い方がいつたい望ましいでしようか」と述べます。そうして、山本は、農業支持論者と商工業論者の間に立つて自分の見聞したイギリスの話を交えながら、我々はこのような現象からどのようなことを学ぶべきかを訴えてみせます。こういう話を同窓会誌に載せたつて生徒に分ろうはずがないと思いますが、明治三十年代、佐渡中学の卒業生が大勢渡米し、大成功します。（だから、時代とは恐ろしいもので）私どもは先輩達を、よう頑張つてくれた、との感慨を抱きますが、そんなことではなく本気になつて渡米し、その中からたくさんのが成功者を生んだということになるかと思ひます。

山本は、演壇で、「諸君はこの多忙なヤングジャパンを背負うて立つべきで、明晰なブレインを有する者であるがゆえに、どのように国力の充実を図るべきか、そして如何にしてこれを実行するかを、よくよく考えて見なければなりません」と一時間半の講演を終えます。

山本悌二郎のこういう考え方、他所へ行つていろいろのものを見て帰り、国のありようを考えてみせるということは、大変大きな意味があると、私は初めに紹介した高田慎蔵を見ていつも思うんです。官営の八幡製鉄所は初めは新潟に建つ予定でした。当時新発田の赤谷鉱山が日本で一番大きい鉄鉱石の産地でした。しかし、高田は、それは止めたほうが多い、将来必ず支那の鉄鉱石を使うようになると言つたのです。高田は明治二十年頃にヨーロッパの商況を勉強しにロンドンに行きますが、たつた半年ほどの視察で、よくそんな見識を得たものだと驚かざるを得ません。それで、結局福岡に八幡製鉄所が出来るんです。私どもはその後、日本が中国の一部を治めたことを思つて、よい見通しだったと言いますけれども、それだけではなしに、世界地図を自分の頭に描いて見せたということはいいことだと思うわけです。新潟県に製鉄所が出来ていたら、佐渡にとつては良いことかもしれませんが、日本全体を考えれば、やはり適当でなかつたということです。このように他国

を見聞するということはいいことなんです。

佐渡中学の四代校長の柏原一徳が、創立十周年記念に、「生徒諸君等は学校を出たら世界へ羽ばたけ、世界を見てくるがいい」と述べております。それを聞いた中から、いろんな考え、広いものの考え方を持つようになることを一つ話したい。

私が平生思うのは、本間雅晴中将のことです。後に日銀総裁になつた澄田さんが「私の履歴書」に書いておりました。

「私は軍人になれないことを恥ずかしく思うと言つたら、君、何でもいろんなことで国のために役立つことはあるんだよ、と本間中将が言つた。自分に将官になれ、軍人になれと言わないで、自分の生きてきたところで自分なりの役割を果たすことが本懐である、と言つたことが一生忘れ得ません」

義理や人情で書いたんじゃないだろうと思ひます。こういう広い視野を持つた人たちが佐渡からたくさん生まれてきます。

私たちの時代になつて駄目になつたのは、先輩諸兄がためになることを教えてくれなかつたからだと、まあこれは屁理屈ですけれども。人生は出会いであるというのは確かなことのようであり、付きあいは時間の長さではなく、深さであるということも確かによう、

この頃思えてきました。

今日は、人との出会い、ちょっとばかり身の回りにある状況、環境というものがその人に影響を与えて、明治の佐渡に、世界の中での日本を考えるような考え方が生み出されてきた。そのことについて、明治の北一輝という人物が登場する周辺を、北一輝をめぐる出会い、とりわけ八田三喜と山本悌二郎を中心にお話してみました。自分独りで偉くなつたという人がおりましたら、それはそうでありましょうから（笑い声）、帳消しにしておいて下さい。

（了）

## ●人物等略記

### ・高田商会

高田慎蔵（相川生まれ）が明治14年に設立した貿易商社。高田は明治3年上京、アーレンス、ペールという二つのドイツ商館に勤務し、貿易実務に熟達。14年ペール商会破綻後、同商会支配人のイギリス人スコットなどとパートナーシップ高田商会を組織、ヨーロッパ製造会社のペール商会の代理販売権を含む資産を継承。21年、高田個人の事業に切替えたが、機械・船舶の輸入に力を発揮、機械輸入高は日本の商社中最大といわれた。ロンドン、ニューヨーク、上海などに支店を置き、また海運、土木建築、不動産、鉱山業などに事業を拡大。傘下の諸事業を株式会社に組織、小規模ながら財閥コンツェルンを形成。高田は大正10年病没。それ以後は、関東大震災による輸入品在庫の焼失及び震災後の為替下落による損失のため休業する。

### ・益田孝（嘉永元年～昭和13年）

相川生まれ。安政2年（1859）父に従い江戸に出て英語や洋式兵法を学ぶ。文久3年（1863）池田筑後守に随行し渡欧。明治5年（1872）大蔵省に入ったが、翌年井上馨らとともに退官。先収会社の経営にあたり、同社の三井組合併とともに三井組に移る。明治9年（1876）三井物産の初代社長に就任、巨大貿易商社に大成させた。中上川彦次郎の産業主義に対抗して、商業主義を主張して対立したが、三池炭坑の払い下げに尽力、三井のドル箱とした。中上川没後、再び三井財閥の中心となり、明治42年同族会管理部を法人化して三井合名会社に改組、財閥の組織整備を進めた。商法講習所を設立。鈍翁と号し、茶人、美術愛好家としても有名。

### ・品川弥二郎（天保14年～明治33年）

長州萩藩出身。松下村塾に入り尊攘・倒幕運動に参加、薩長同盟に尽力し、戊辰戦争では東北各地を転戦。明治3年渡欧し、プロイセンの農政、協同組合を研究。14年農商務省大輔となり、大日本農会、共同運輸会社を設立に尽力。24年松方内閣のとき内相となり、翌年の総選挙で大選挙干渉を行い、辞職。同年、干渉で当選した政府系議員で国民協会を組織し、会頭となる。

・山本悌二郎（明治3年～昭和12年）

真野町生まれ。実業家、政治家。明治19年ドイツ留学、農学博士となり、33年台湾精糖会社の創立に関与、のち社長となる。明治37年以来衆議院議員当選11回。昭和2年、6年に農相。

・青野季吉（明治23年～昭和36年）

沢根（佐和田）生まれ。文芸評論家。大正11年「心靈の滅亡」を発表、評論家としてデビュー、翌年「種等く人」同人となり、更に「文芸戦線」で活躍。プレタリア文学理論の確立に努めた。昭和13年人民戦線事件に連座し、転向。後に文芸家協会会長などを務める。

・本間雅晴（明治20年～昭和21年）

畠野町生まれ。陸軍中将。太平洋戦争時、フィリピン軍司令官として、バターンの「死の行進」の責任者として銃殺刑となる。